

# 大杉栄とロマン・ロラン

——「憎悪」と「調和」の美学——

曾田秀彦

## 「革命文芸論」と「民衆芸術論」

大杉栄の「民衆芸術論」のなかでも最も重要な論文、「新しき世界の為めの新しき芸術」(早稲田大学「大六、一〇」)は、その半分以上をロマン・ロランの「民衆劇論」Le Theatre du Peuple の要約、紹介に当てるといふ見事な論文の構成をとっているかに見え、従って大杉栄の「民衆芸術論」を見ていく場合には、ロランの「民衆劇論」を避けて通るのは、まずもってむづかしいように思われる。〈大杉栄とロマン・ロラン〉という問題が、大杉栄の「民衆芸術論」の研究にとって、その重要なものの一つに挙げられるのは間違いないであろう。

大杉栄の「民衆芸術論」を「新しき世界の為めの新しき芸術」を中心にしてみた場合、誰しも感ずる戸惑いは、どこまでが大杉栄の意見であるか、どこまでがロマン・ロランの意見であるかが、判断しかねるということではないだろうか。大杉栄は大正六年六月、ロ

ランの《Theatre du Peuple》を「民衆芸術論」という訳題にして、阿蘭陀書房から、その全訳を刊行しており、ロランのこの演劇論のわが国最初の訳者であった。訳者の普通の心理的傾向として、自分と原作者とを一体化しがちである。ロランの「民衆劇論」の訳者であった大杉栄が、ロランと自分を同一化していくのは、心理的な面から言って、あながち不自然なこととは言いつてもいい。しかし、大杉栄におけるロランとの自己同一化は、後に述べるように、この心理的な理由からだけではなかつたように思う。

今日の大杉栄の研究者は、彼の「民衆芸術論」とロマン・ロランとのあまりに明白な関係を否定してはいないけれども、大杉とロランの意見が区別しがたいために、少々当惑ぎみの体である。「民衆芸術論」における大杉栄の独自性を追求しようとするれば、ロランの存在はかなりやっかいなものに見える、ロランを脇におしやうて、大杉のみに言及しようとする傾向が、彼らにはあるのではなからうか。このような立場をとる研究者にとって、まことに好都合なものに、

「征服の事実」「生の拡充」「民衆芸術論」説というのがある。この説をとる研究者としては、大沢正道氏と森山重雄氏が、まず挙げられるであろう。「征服の事実」(「近代思想」大二、六)「生の拡充」(同、大二、七)とは、「近代思想」時代の大杉栄の革命文芸論であり、彼の最もユニークな文学的主張、「憎悪美と反逆美との創造的文芸」というものを唱導した論文であった。

大沢正道氏は「大杉栄研究」(法政大学出版局、昭四六)のなかで、「大杉の考え方の流れを忠実に追っていくなら、「近代思想」での「憎悪美と反逆美」の文学論と「民衆芸術論」とは、まことに素直に接続する。彼が「新しき世界のための新しき芸術」のなかで、「征服の事実」や「生の拡充」で主張した「僕のこの芸術論は明白な民衆芸術論であった」と述べたのは、決して牽強附会の言い分ではない」というふう述べている。森山重雄氏も「実行と芸術」(堀書房、昭四四)において、「彼(大杉)が「征服の事実」や「生の拡充」においてすでに提起したところのアナーキズム芸術論は、明白な民衆芸術論であったのだ」と述べているのである。

この大沢正道、森山重雄の両氏の考えにそっていくと、「近代思想」時代の「大杉栄の革命文芸論は、大正六以後の彼の「民衆芸術論」つまり「新しき世界のための新しき芸術」「社会問題か芸術問題か」「文明批評」大七、一」「正義を求める心」(同、大七、一)「民衆芸術の技巧」(「民衆の芸術」大七、七)に、「民衆芸術論」という共通項によって、無理なく結ばれていき、そこではもはや、「大杉栄とロマン・ロラン」ということは、さほどの問題とはならなくなつて来よう。このようなところから、森山重雄氏の「むしろ大杉

がロランの「民衆芸術論」にとらわれないで、彼が「征服の事実」「生の拡充」で擲んだ芸術観を、当時の民衆と文学の実態に即して展開したら、もっと注目すべき結果が生まれたらう」という仮定も、可能になるのに相違ない。しかし、「近代思想」時代の「大杉の革命文芸論と、彼の「民衆芸術論」の接続するところには、ロランの「民衆芸術論」があつたはずではないか。大杉栄はロマン・ロランに遭遇することによって、彼の「民衆芸術論」を生み出したのである。それはロランと出会うことなしには、生み出されなかったものではあるまいか。

「近代思想」系の評論家であつた安成貞雄は、本間久雄の「民衆芸術の意義及び価値」(「早稲田文学」大五、八)を批判した「君は貴族か平民か」(「読売新聞」大五、八)において、本間久雄を非難するあまりに、「民衆芸術」の主張が芸術に階級の柵を作らんとするものである。「ケイのロランの「民衆芸術」の主張は、畢竟労働者階級を懐柔せんとする上流階級の企図の一部に過ぎない」と述べ「民衆芸術」の主張を上流階級の画策だとして、これを否定してしまつたのである。「民衆芸術論」の上での安成貞雄と大杉栄との大きな相違は、安成貞雄が直接には、ロランの「民衆芸術論」の中味を知らなかつたということがあり、大杉栄がこの演劇論の翻訳者であり、その内容を知つていたということがある。しかも大杉栄の方は、ロランの「民衆芸術論」を彼の「民衆芸術論」の一つの指針とし、ロランに触発されながら、彼の「民衆芸術」の主張を展開していったようである。つまり、大杉が彼の「近代思想」時代の革命文芸論から、大沢氏の言う「民衆を主体とする芸術論」「新しき世

界のための新しき芸術」などの彼の「民衆芸術論」へと変化していったところには、ロランの「民衆芸術論」の影響を認めざるを得ないのではあるまいか。「新しき世界のための新しき芸術」において、大杉栄は安成貞雄と同様に、本間久雄の「民衆芸術論」を厳しく批判しているけれども、大杉の場合、安成のような「民衆芸術論」の否定にならなかつたのも、その中心にロランの「民衆芸術論」という支えがあつたからではないだろうか。大杉栄におけるロランということとを抜きにして、大杉が「民衆芸術論」の否定に傾むくことはあり得なかつたという証拠を、どの程度挙げることができるのであろうか。

ところで、問題の「征服の事実」と「生の拡充」という二つの論文は、どのような内容のものであつたか、以下にその内容を簡単に見ていきたい。

大杉栄はこの二つの論文において、原始から現代までの人類社会の発展を眺望しながら、「憎悪美と反逆美との創造的文芸」という彼の文学的主張をおこなつたのであつた。大杉栄によると、原始社会の初期には、人類は動物と同じような生活をおくりながらも、各集団とも相争うこともなく四方八方に移住し、安楽と平和のうちに生活して、それは、人間の黄金時代であつた。しかし、やがて各集団の人口増加につれて、相互の接触と衝突が生じていき、戦争がおこなわれるようになる。ここに文明と歴史が始まるのであるが、戦争における勝者が征服者となり敗者が被征服者となつて、敵視し反

感する二種族が、社会の両極を形づくっていくようになった。そして、征服者が被征服者を本当に征服し、完全に統治していくために、諸種の社会制度というものを考案していくのである。従つて、現代の政治、法律、宗教、教育、その他諸々の社会制度といえども、征服者による統治方法として発達した暴力と瞞着の巧妙な組織立てにすぎないのであり、その根底にある征服の事実ということが、人類社会の根本事実であるのだ。この日常生活まで圧迫する征服の事実に対して、生が生きていくためには、この社会的事実に対して憎悪し、反抗していかねばならない。そこに「近代思想の基調」(「生の拡充」)である生が拡充がなされていくのである。このように、「この生の神髄はすなわち自我である。そして自我とは要するに一種の力である。力学上の力と法則に従う一種の力である」(同)という「生」によって、征服の事実を憎悪し、反抗して生を拡充していくところに美があり、その美は乱調である。かくして大杉栄は、「確実な社会的知識の根底の上に築かれた、徹底せる憎悪美と反逆美との創造的文芸」の出現を、待望するのであつた。

「憎悪美と反逆美との創造的文芸」という彼の革命文芸論の基調は、彼が「生の創造」(「近代思想」大三、一)で「自我は自由に思索し自由に行動する。ニイチェの云へるが如く、彼岸に向ふ渴望の矢である。吾々は先づ、此の自我を、一切の将来を含む此の神秘的芽、捕捉し發育せしめねばならぬ」と述べているような「自我」であり、その自我は自由意志に基づくニーチェ流の観念的・神秘的

な「生」であった。この「生」が階級的な「憎悪」という情念と結合していくところ、つまり「増悪の思想」とでも言うべきもの、あるいは「憎悪と反抗」という理念に支えられて、彼の「憎悪美と反逆美との創造的文芸」が提唱されていくのである。

さて、大杉栄のニーチェ流の「生」を基調とし、それを主体とする「憎悪美と反逆美との創造的文芸」の主張が、はたして大沢正道氏や森山重雄氏の断言するように、「民衆芸術論」であったかどうか。その辺りを少し考えて見たい。

2

大沢正道、森山重雄の両氏の共通する立場、「征服の事実」「生の拡充」＝「民衆芸術論」説が、どうしておこつて来るのであろうか。この説の張本人は、先の大沢氏の文章にもあるように、大杉栄自身であり、それは「新しき世界の為めの新しき芸術」のなかで、彼が「征服の事実」「生の拡充」を指して、「僕の此の芸術論は明白な民衆芸術論であったのである」と述べているからである。従つて、大沢正道氏も森山重雄氏も、大杉栄のこの言い分を鵜呑みにしているわけであるが、両氏とも、大杉栄がそれに続けて、「僕の要求する芸術論は、ロマン・ロオランの謂はゆる、新しき世界の為めの新しき芸術であった」と述べているところには、一言も触れていないのである。大杉栄は、ここで、自分の「征服の事実」や「生の拡充」という革命文芸論が、ロマン・ロオランの「民衆劇論」と同様の「民衆芸術論」であったと主張しているのであつて、たんなる「民衆芸

術論」だと言っているわけではない。そのところを彼は、次のように書いていたのであつた。

僕の此の芸術論（「征服の事実」「生の拡充」）は明白な民衆芸術論であつたのである。僕の要求する芸術は、ロマン・ロオランの謂はゆる、新しき世界の為めの新しき芸術であつたのである。然るに、第一に此の芸術論に反対したのは、実は今回の民衆芸術論の最初の提唱者、本間久雄君其人であつたのだ。本間久雄君は憎悪に美はないと云つた。反抗に美はないと云つた。

右の文章で、「征服の事実」「生の拡充」が「明白な民衆芸術論であつた」かなかつたかということ以上に重要な問題は、ここで大杉栄が、ロマン・ロオランと自分を結びつけ、重ね合せようと試みていることではないだろうか。「新しき世界の為めの新しき芸術」における大杉栄の第一の目的は、彼が本間久雄批判の有力な武器として、ロランを持ち出してくるところからも推察されるように、本間久雄の「民衆芸術論」を批判するところにあつたように思われる。本間久雄の時評「六月の評論」（『読売新聞』大二、六）での大杉栄「征服の事実」に対する評言、「憎悪、反逆といふネガチブの態度を把る以上、その憎悪、反逆といふことは、いかなる意味に於ても美を感受するといふことがあり得ない訳である」などを大杉は捉えて、それと「征服の事実」などの文芸論が、ロランと同様の「民

衆芸術論」であるという自己の主張と組合せて、先の引用に見えるような本間久雄批判をつくり上げたのであつた。大杉栄はこの時、次のようなことを考えていたのではないだろうか。「近代思想」時代の自分の文芸論が、ロランの「民衆劇論」と同様の「明白な民衆芸術論であつた」とすれば、本間久雄がこの文芸論に反対するのは、ロランの「民衆芸術」の主張に反対したことになるではないか、そしてこの事実が明らかであれば、ロランの「民衆芸術論」にも依拠するという本間久雄の「民衆芸術」の提唱は、自己の根拠に反対するということ自家撞着に陥つていたことになり、彼の主張は、信頼するに足らないということになるではないか。つまり大杉栄は、ロマン・ロオランの側にあるのは本間久雄でなくして、いや彼はロランに反対したのであつて、自分こそロランと同じ立場にあり、ロランの「民衆劇論」を継承しているのだと言いたかつたのではあるまいか。そして、彼はこのような考えを基点として、本間久雄の「民衆芸術論」を、徹底的に批判しようとしたように思われるのである。従つて、大杉栄におけるロランの自己同一化は、すでに述べたようなロランの翻訳者として生じる彼の心理的傾向という以上に、彼の本間久雄批判という目的のために、自分とロランの一体化をはからなくてはならなかつた。もう一步進めて言えば、彼には、ロマン・ロオランという「仮面」をかぶる必要があつたというふうに、言えるのではないだろうか。

ところで、大杉栄が主張しているように、彼の「征服の事実」と

「生の拡充」が、ロランの「民衆劇論」と同様の「民衆芸術論」であつたのだろうか。「征服の事実」と「生の拡充」の二論文を読んで気づくことは、大杉栄がこの二つの論文のなかで、一度も「民衆」あるいは「平民」という言葉を用いていないことである。たしかに彼の「被征服者」という言葉が、それに代るものであり、「民衆」ないし「平民」を指していると言えは、言えないことはないだろう。しかし、彼の「被征服者」は、「人類社会の根本事実」（「征服の事実」）また「確実な社会的知識の根底」（「生の拡充」）のうちに閉じこめられたままに見られているにすぎず、歴史社会の客体的存在であつたとしても、まだまだ、芸術とかわりをもつような人格的存在に達しているように見えないのである。しかも大杉栄は、「征服の事実」「生の拡充」に続く「鎖工場」（「近代思想」大二、九）では、「俺はもう衆愚には絶望した。俺の希望は、ただ俺の上にかつた。自我の能力と権威とを自覚し、多少の自己革命を経、さらに自己拡大のために奮闘努力する、極少の少数者の上のみにかつた」と述べていたのであつた。大杉栄に民衆不信があつたかどうかは、今問わないとしても、少くともここには、彼が自我の能力と権威とを自覚した「極少の少数者」、「生の拡充」で言われている「被征服者中の少数者」にしか希望を託さず、信頼をおかないといった彼の態度が、におわされているようである。

一方、ロランの「民衆劇論」は後で詳しく見るように、民衆に最大の希望と未来を託し、芸術に民衆の生命を注ぎこむことによつて、

芸術を更生させようとした芸術革命の理論であった。大杉栄の「被征服者」あるいは「被征服者中の少数者」と、ロランの「主人公でもあれば見物人であって、その演劇の靈感者であるはずの『民衆』」(『内面の旅路』片山敏彦訳)との間には、どれほどの距離があるであろうか。その両者の相違は、ここに詳しく述べる必要はないほどに明白であるかと思う。また、神秘的なニーチェ流の「生」を、創造的主体とする大杉栄の「憎悪美と反逆美」の革命文芸論と、ルイ・セバスチアン・メルシェの「民衆からインスピレーションを受け、民衆のための民衆劇を創ること」(『民衆劇論』宮本正清訳)という考えを継承し、「民衆」を主体とする「民衆による、民衆のための劇場 Le Theatre par et pour le Peuple」(同)を唱えたロランの民衆演劇論とを、同一視したり、同一の芸術論のカテゴリーのなかに入れて見ることができであろうか。

ロランの「民衆劇論」については、後ほど詳しく論ずるが、今とりあえず結論的に言えば、大杉栄の主張に反して、右に見たように彼の「征服の事実」「生の拡充」をもって、ロランの「民衆劇論」と同様の「民衆芸術論」だとするのは、妥当であるとは言えないのである。このように、ロランの「民衆劇論」を基準にして「民衆芸術論」を考えるのであれば、大杉栄の場合はやはり、「民衆芸術論」は「新しき世界の為めの新しき芸術」以後であり、それ以前の文芸論が、いかに革命の文学、文学の革命を主張しているようにとも、大沢正道氏、森山重雄氏の意見に反して、それらを「民衆芸術論」とは

認めがたいのではないだろうか。

3

大杉栄の「征服の事実」「生の拡充」が、彼の言うようには「民衆芸術論」だとは思えないところから、はやくも、彼のロランという「仮面」はやはり「仮面」にすぎなかったというふうに、言えるであろうか。しかし、大杉栄は、大沢正道氏や森山重雄氏のように、それらの文芸論が、「民衆芸術論」であったとだけ、言っていたわけでもなく、そのような単純なことを考えていたわけでもなかった。彼は自分の革命文芸論が「民衆芸術論」であった述べる裏側では、「憎悪の思想」または「憎悪と反抗」という根本理念をもって、それらの文芸論とロランの「民衆劇論」とを結びつけようとしていたのである。

彼は最初、自分の「憎悪美と反逆美との創造的文芸」の主張が、ロランの「民衆劇論」と共通する芸術の理念だとして、その考によって、彼の革命文芸論に反対した本間久雄を非難したのである。ところが、ロランの「民衆劇論」において、「憎悪美と反逆美との創造的文芸」と同様のことが唱えられているとは、彼自身あまり信じていなかったらしく、すぐに「憎悪や反抗に美があるかないかの問題などどうでもいい」と述べて、その考えを中途半端のままにしてしまったのである。しかし彼は、「憎悪美と反逆美との創造的文芸」の主張の根底にある「憎悪の思想」という彼の根本思想、「憎悪と

反抗」という彼の根本理念まで、ひき下げようとはしていないかった。いや、彼は「憎悪と反抗」という理念を強調することによって、自分とロランとを結びつけようとして試みたのである。そのところを彼は、次のように、述べているのであった。

……本間久雄君は憎悪に美はないと云った、反抗に美はないと云った。

フランスでの民衆芸術の提唱者、ロメン・ロオランはさすがに分つてゐる。ロオランは云ふ。

「……………芸術の目的は、生を豊富にし、力強くし、更に大きく更に善くする事である。されば若し愛と結合とが其の目的であるとすれば、憎悪は或る時期まで恐らくは其の武器である。……………悪を憎まないものは、又善をも愛せないものである。不正義を見て、それと闘ふ氣を起さないものは、全然芸術家でもなければ、又、全然人間でもない。」

憎悪や反抗に美があるかないかの問題などどうでもいい。しかし此の憎悪や反抗に与しないものは「全然芸術家でもなければ、又、全然人間でもない」のだ。この本間君の思想は、其の後二ヶ年間に、どれほどの進歩があったのか知らない。しかし兎に角此の本間君が、日本に於ける民衆芸術論の最初の提唱者であるのだ。

右の「新しき世界の為めの新しき芸術」の文章中、彼が引用して

いるのは、ロランが「民衆劇論」のなかで、「社会劇」について語った文章の一部である。大杉栄はロランのこの文章を引きながら、芸術における「憎悪と反抗」ということを、ロランも認めているばかりでなく、それを強調しているのではないかと見て、本間久雄とは異なって、ロランの「民衆劇論」と自分の「征服の事実」や「生の拡充」とは、「憎悪と反抗」の芸術を主張したことにおいて、共通の立場にあるというように示唆したのであった。

この自己の芸術的立場の言明とともに、大杉栄は、本間久雄を「フランスでの民衆芸術の提唱者、ロメン・ロオラン」に对照させながら、「本間君が、日本に於ける民衆芸術論の最初の提唱者であるのだ」と皮肉めいた言い方をしている。しかし、本間久雄の前出の時評「六月の評論」に限って言えば、大杉栄が「憎悪と反抗」という理念でもって彼を批判しているのは、正当でなく、その非難は当たらないように思う。彼はその時評において、「憎悪や反抗に美があるかないか」ということを問題にしたのであり、所謂「征服の事実」に対する意識を、なんらかの芸術様式に客観化しない限り、美は感受されないと言っていたのであって、社会的、倫理的な「憎悪と反抗」を否定したわけではなかった。第一、彼のこの時評は、大杉の「吾々の要求する芸術は、征服の事実に対する憎悪美と反逆美との創造的文芸である」という主張に、一応、「氏の主張にも充分同感することが出来る」と述べるほどに、「征服の事実」という論文に關する一面からすれば、かなり好意的な批評であったのである。

「新しき世界の為めの新しき芸術」における大杉栄の本間久雄批判は、今日でも「民衆芸術論」の研究者の一部に、そのまま受け入れられ、信じられられているようであるが、大杉のこの批判が、彼の偏見と不公正、彼の党派性をもって本間久雄に対していたという点は、見落されているのではあるまいか。大杉栄はこの時、本間久雄もロランから切り離し、ロランと自分を結びつけることに熱中して、公正とか正当性とかは、彼には用がなかったかに見えるほどである。

さて、大杉栄が、ロランと本間久雄を切り離し、一方では芸術には芸術における「憎悪と反抗」という理念で、ロランと共通する自己の立場を言明した彼のこの主張を、全面的に認めるならば、ここにおいて再び、ロランと大杉とは一体化されていくのではないだろうか。そして、「新しき世界の為めの新しき芸術」の彼によるロランの「民衆劇論」の要約、その紹介も、ロランの意見であるとともに、大杉の意見でもあるというふうな単純化され、大杉栄とロマン・ロラン」という問題も、おおかた消え去っていくのに相違ない。また、「征服の事実」や「生の拡充」も、「民衆芸術論」であるうとなかろうと、「憎悪と反抗」という根本理念によってロランの「民衆劇論」につながり、さらには、「新しき世界の為めの新しき芸術」のロラン紹介の部分にも、無理なく接続していくのに違いない。

このように大杉の主張を鵜呑みにし、大杉の目でロランの「民衆

劇論」を見てしまえば、ロランの意見と大杉の意見とは、まったくと言ってよいほど、区別がつかなくなってしまうのであるまいか。そればかりではなく、ロランの意見もすべて、大杉の意見であるかに見えてくるのではないだろうか。窪村義貫氏は「大杉栄とロマン・ロラン」(『ロマン・ロラン研究』昭四六・一〇)で、「大杉は、『新しき世界の為めの新しき芸術』の中で、ロランの意見をそのまま自分の中で消化した形で主張を展開している」と述べているが、この意見などは、大杉の主張を鵜呑みにした結果出て来たものではないかと思われる。

大杉栄が本間久雄批判という理由から、ロランという「仮面」をかぶる必要があったのではないかということは、すでに述べた。彼は、「新しき世界の為めの新しき芸術」の読者に対して、ロランと彼とを一体化して見るように、そしてロランの「民衆劇論」も、彼の目を通して見るように、要求しているように見えるのである。しかし、ロランという「仮面」と大杉栄の「素顔」とは、まったく同じ容貌をしているのであろうか。それとも、「仮面」はやはり「仮面」にすぎないのであろうか。つまり、「新しき世界の為めの新しき芸術」という論文は、窪村義貫氏が「(大杉は)ロランの意見をそのまま自分の中で消化した形で主張を展開している」と述べるような、悪く言えばロランの意見の二番煎じであるのか、それとも、その要約紹介のうちにも、ロランとは異なる彼独自の見解が示されているのか。大杉栄はまったくと言ってよいほど、ロランという「仮

面」の陰に自分の「素顔」をかくそうとしているため、たとえ「仮面」と「素顔」との間に、ある距離があったとしても、そこはなかなか掴みにくいのに相違ない。しかし、大杉栄の「民衆芸術論」の性格を知るためには、どこまでが「仮面」であり、どこまでが「素顔」であるか、大杉の顔から、ロランという「仮面」を徐々に剥いでいなくてはならないであろう。

### ☆私家本シリーズ第一弾☆

D・J 関光夫氏の実兄関須真夫の贈る  
すぐれて優しい傷痕のメルヘン長詩

定本 五代 格著

真介・夢みる乏食

定価八百円・限定二七五部

「島へ」「鏡面感覚」に次ぐ  
気鋭詩人・望月昶孝の新境地

路傍暮色

定価千五百円

九月一日発売

1969-74 初版三百部

\*直接小社お申込の方に限り 著者自筆  
サイン入本をお送り致します。只今予約受付中!

□季刊ピエロタ□第2号  
戦略特集★大杉栄の思想  
価五百(送共)円 8月末刊

〒162 新宿区神楽坂2の10

吟遊社

振替東京129918番